石巻復興NEWS

石巻専修大学　経営学部丸岡ゼミ　平成 23 年 7 月 31 日発行　創刊号

川開き祭り開催！

石巻夏の風物詩ともいえる川開き祭り。

3 月 11 日に発生した東日本大震災の影響により開催が懸念されていましたが、慰霊と復興に向けての新たなスタートとして開催されることになりました。

7 月 31 日の前夜祭を「鎮魂」8 月 1 日の本祭は「復興」をそれぞれのテーマとして行われます。

石巻地区では昔から水難事故が多く、亡くなられた方の供養や海上安全を祈願する川施餓鬼や海施餓鬼と呼ばれる行事が古くから行われていました。

“これらの行事を充実させ、名物行事として行うべき”と地元の経済会が中心となり大正 5 年 8 月、川村孫兵衛重吉への報恩感謝祭・水難事故の慰霊祭として第 1 回が開催され、現在に至ります。

例年と違い今年は東日本大震災の慰霊と復興に主眼を置いて開催されます。

前夜祭に行われる“流燈”（灯ろう流し）は震災により亡くなった方の供養として盛大に行われます。

これは石巻商工会議所が主催し、NPO 法人である全国明社等の協賛を得て行われ、1 万基の灯ろうが北上川から海へと流されます。

今年は震災の影響により船での回収が困難なため、環境に配慮し、水溶性の灯ろうが使用されます。

こうした新たな特色を加えた“流燈”は慰霊のシンボルとして多くの人の心に残るのではないでしょうか。

また例年夏休み時期に行われていた石巻マンガ灯ろう祭りが前夜祭に同時開催されます。

これは“石巻の街を明るく元気にしていこう”との思いから行われていたもので、今年は子供たちお手製の灯ろう 2500 基が川開き祭りの会場を明るく照らします。

1 日の本祭では、震災の影響で結婚式を挙げることを断念せざるを得なくなった方々のため、地元のブライダル関連事業者との協力による合同結婚式「川開きウェディング」や、東京ディズニーリゾートからディズニーのキャラクターたちが陸上パレードに加わる等、例年とはまた違った魅力を持つ川開き祭りとなっています。

●今年は 1 万基の灯ろうが流される

●今年の花火は 8 月 1 日に打ち上げられる

ボランティアが支える川開き

今回の川開き祭り開催において、縁の下の力持ちとなっているのが石巻災害復興支援協議会を中心とするボランティアの方々です。

災害復興支援協議会とは災害復興支援に関わる NPO, NGO および特別なスキルを方々が連携し合い、円滑で効率的な活動を行うための場を提供する団体です。

同会専務理事の大丸英則さんにお話を伺いました。

「川開祭実行委員会を置く石巻商工会議所より、皆さんにも手伝ってもらえないかという相談を受けました…協議した結果“住民の皆様の笑顔になるなら”との思いから引き受けることにしました」

川開き祭りにおいて石巻圏以外のボランティア団体が設営にかかわることは珍しいことです。

サポートの内容は様々ですが主に、メイン広場の設営および周辺の清掃、流燈準備作業および設営（灯ろうを流す足場の制作）等があります。

流燈の準備作業は石巻で泥出しや漁業支援を行っているオンザロード、四万十塾、日本財団、ピースボート、め組 JAPAN 等の団体の方々と石巻復興支援協議会が協力して準備にあたっています。

石巻駅前にぎわい交流広場では、ボランティアの方々によるステージが設けられ、その周辺には各ボランティア団体のブースが設置されます。

そこでは、これまでの支援活動報告や活動紹介のパネル展示に加え、市民の方々とのふれあいの場が開かれる予定です。

石巻の復興において心身ともに多大な貢献をしているボランティアの方々ですが、これを機会にもっとボランティアの方々と住民の方々の親交が深まることを期待します。

越中岳晴、柿沼志朗、西條貴士

奇跡のボランティア組織

石巻災害復興支援協議会は奇跡の組織と呼ばれます。

石巻はこの震災で多大な被害を受け、ボランティアの受け入れ先となる災害ボランティアセンターを立ち上げる社会福祉協議会も被害を受けました。

一刻も早くボランティア団体を受け入れ、活動ができるようにボランティアセンターとNGO等の団体が連携し、「NPO・NGO支援連絡会」が設立されました。

そして「連絡会」は、多くの団体が参加する活動拠点となり、毎夜活動報告が行われました。

この中で団体の性格、活動スタイルの違いによってうまく協力ができておらず非効率的であり活動報告に時間がかかってしまうという問題が判明しました。

石巻災害復興支援協議会会長である伊藤秀樹氏の提案で、ボランティアを活動ごとに分科会に分け、個人個人のスキルに合った分科会に所属させることにしました（図参照）。

これにより団体同士が協力、活動が効率化したため活動報告は１時間程度でまとまるようになりました。

そして「連絡会」は、“単なる団体間の連絡調整の場にとどまらず、石巻復興に責任を持つ”という事で「石巻災害復興支援協議会」に変更されました。

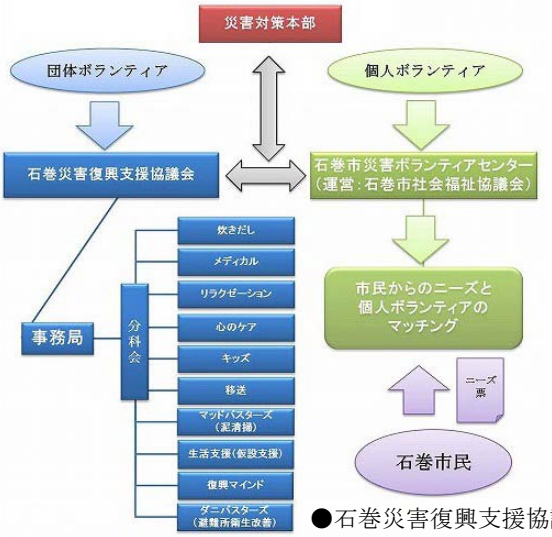
それと同時に、独自で活動を展開していた団体ボランティアの受け入れを引き受け、個人ボランティアの対応を社会福祉協議会が担当することが決まりました。
これを「石巻方式(石巻モデル)」といいます。

伊藤氏は株式会社藤急建設の社長で石巻青年会議所理事長を務めたこともありました。

彼は、阪神・淡路大震災(1995)、ナホトカ号原油流出事件(1997)、栃木・福島洪水(1998)と多くの震災でボランティア活動に参加した経験から、それぞれの団体がもつ主義や主張を理解したうえで「ボランティアが活動しやすいフィールド整備に徹する」という条件のもと会長職を引き受けました。

亀山紘石巻市長の提案で、自衛隊等が集まる石巻市災害対策本部の会議に「協議会」のメンバーを出席させ、活動報告を行うことでボランティアと自衛隊の連携も生まれました。

それまでは、両者の情報が行き交うことがなかったため、同じ場所で炊き出しをするなどのアクシデントが度々ありましたが、連絡手段が出来たおかげでそのようなこともなくなりました。



●石巻災害復興支援協議会組織図

●石巻災害復興支援協議会の様子

また、石巻専修大学が多くのボランティアを受け入れる拠点として機能しました。

校舎の一室を事務局に当て、屋内練習場を物資倉庫に、また駐車場は大型トラックが出入りできるようにしたほか、陸上競技場はボランティアの宿泊場として約２千人分のテントからなるテント村となりました。

もともと、石巻専修大学と石巻市は災害時の連携を定めた『災害協定』を３月末に結ぶ予定だったのですが、直前に震災が起きてしまいました。

震災から３日後、亀山市長の決断により大学を防災拠点として開放して欲しいと要請、大学側の承諾を得て、避難民とボランティアの受け入れが行なわれました。

大学がボランティアの拠点になることは日本で初めての事です。

会長の伊藤氏は「もし、石巻専修大学が拠点として使えなかったら復興は恐らく三倍以上遅れていたのではないだろうか」とおっしゃっておられました。

石巻災害復興支援協議会が奇跡の組織と呼ばれる理由は、今回の震災で多大な被害を受けた被災側と被災地を助けたいという個人のボランティアや各種団体、自衛隊や「協議会」の連携・協力があったことと、多くのボランティアを受け入れる仕組みによりボランティアが活動しやすい環境を作れたことにあります。

永田清龍、松原明広、佐藤良輔、施奇磊

～創刊のご挨拶～

『石巻復興NEWS』は東日本大震災後、石巻の復興の力となっているボランティアと住民の交流促進を目指して創刊されたミニコミ誌です。

石巻専修大学経営学部丸岡泰ゼミの学生が執筆・編集を行っています。

これから私たちは紙面を通じて、石巻の復興を見守り、記録に残す作業を行いたいと考えております。

よろしくお願いします。

石巻専修大学准教授　丸岡泰

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。
E-mail　senshu-maruoka@inter7.jp